動物園飼育日記 —102— 亀井一成

ないしょ話シリーズ〈23〉 ゾウ、体重の〝自意識〟

子供たちの投げこむビスケットやピーナツを、ひとつ残さず器用に鼻先でつまむゾウさん。

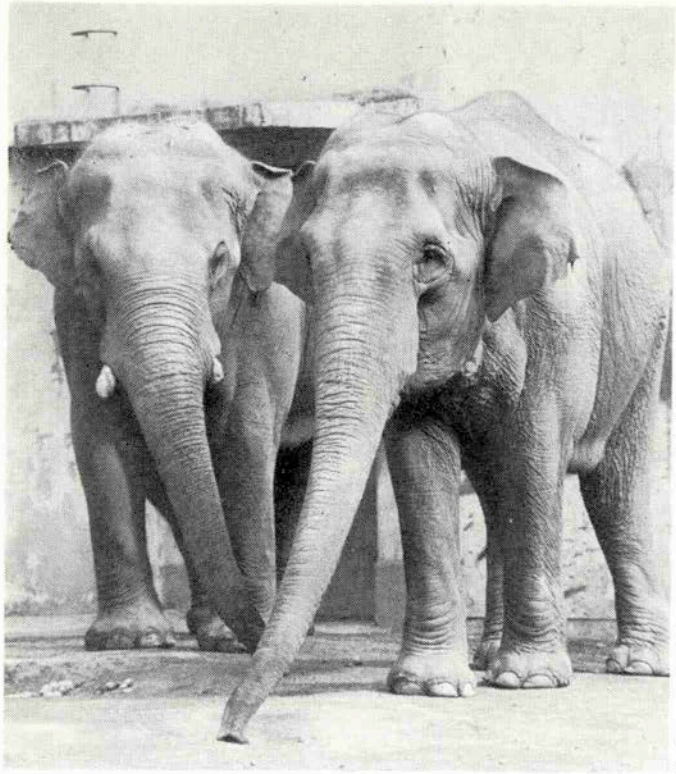
だが、よく見ると、あのデカイ体に小さな眼、しかも左右の眼が大きな顔の両横にある。それがため、両眼がならぶ我々のような立体視ができない。だからゾウさん、ちいちゃな眼で大体の方向に鼻をすーとのばし、あとはすぐれた鼻の嗅覚でビスケットやピーナッツをまるで手操り、いや鼻探り、鼻先をちょいちょいとあちら、こちらと向け探しあてる。そのゾウさんの愛きょうぶりに〝もう少しこっち！〟〝いや、そっち！〟とエサを与えた子供たちのとがらした口元から声援がさかんにとぶ遠足のひとコマだ。これはつまり、ゾウは眼よりも鼻の動物であることを教えた。

私はそんな学童たちにもうひとつ、〝力もちゾウさん〟を知ってもらうため、コロコロところぶ大きな南瓜をゾウに与えてみせた。ところがゾウは小さなビスケット同様、鼻でまきあげ口元までもっていったが、あーンと開けられないおちょぼ口のゾウは、南瓜をぽろりと何度も落して食べられない。するとどうだろう。考えたゾウは、あの太い大きな前足でぎゅうと踏みつけ、いともかんたんに割った、その南瓜のカケラをぽいぽいつまんで食べはじめた。

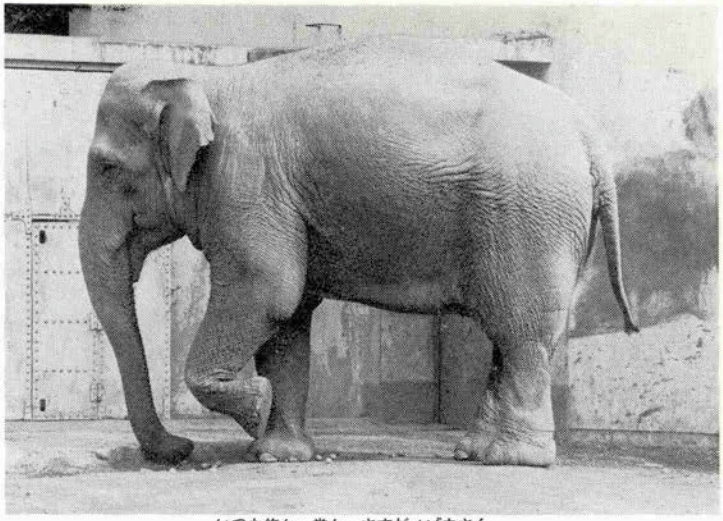
それに干し草や稲わらを引きちぎるにも片足で踏みつけ、鼻でねじり切ったあと、ぱちんと〝むこうずね〟でホコリやわらのしぶ皮を払いとばしては、おいしそうに食べている。そのとき、早や食いのオスゾウがやってきて、ゆっくり型のメスゾウの南瓜に手、いや鼻を出した。やっぱりゾウでも取り合いっこするんやなあ！と思う次のせつな、一瞬力をこめた鼻づらでオスゾウを押しのけようとしたが、それでもききめがなかったら、こんどは二、三歩あとずさり、反動をつけて相手に突きかかる。かと思えば、次の手は、うしろ向き、お尻からでーンと体当りならぬ〝尻当り〟で立ち向うメスゾウの男まさりぶりだ。

このようにひとつひとつを観察するとき、ゾウの生活には常に体重の〝自意識〟がのぞかれるのである。

かつて私はラッパ吹きや逆立ち、ランゲイ渡りと芸達者に仕こんだメスゾウ〝まや子〟を連れ、近畿一円の地方都市を移動動物園として〝出稼ぎ出張〟した。その際にも、揺れる貨車の乗り降りや、はじめて歩く田舎の学校の校庭までの道すがら、幾度か立ち止り頑として動かな



動物園で仲の良いところを見せるゾウさん夫妻。


いつも悠々、堂々、さすが！ゾウさん。

い。そのゾウに悩みとおしたのが、流れる川の土橋や学校の門柱であった。

コンクリートや鉄橋ならそれほど警戒心も見せないゾウが、丸太に土のかぶった、つまり〝土橋〟はたとえアスファルトがかぶっていようが、わざと遠回り、川に入りこんで渡ろうとして困まらせた。それにたいていの会場である学校校門前でまたひとしきりだだをこねた。それは狭い門柱が丸太で作った出口のない迷い道にゾウを追いこみ、捕まえるというインドゾウの捕獲法（ケッタと呼ぶ）つまり〝袋小路〟の不安が彼女にあったのだろう。

〝まや、大丈夫だ、落着いてくれ〟と、たったひとりで連れ歩いた私は、背や腹、そして太い足、それに柔かいほっぺや眼をさすってやっては安心させるのにせいいっぱい、彼女に願ったことであった。

またある夜、そのまや子が会場に迷いこんできたイヌに激しい攻撃をかけた。

どんなことがあってもゾウをおいて出かけるなど決してできない。校庭に丸太を打ちこみ、にわか作りのテントの中、彼女の食料である稲わらや干草の上で毎夜寝たのであったが、田舎の牛や馬に馴れたイヌにちがいない、うす暗いテントにひょっこり入ってきた。そのイヌに興奮したゾウは両耳をパッと広げ、すごい鼻イキの一瞬、そのイヌを鼻でぶちかました。と、間髪入れず、つながれた鎖の伸びる限り走り寄り、倒れたそのイヌをひきよせ、次には前足でひと踏み、とどめの攻撃をみせたのであった。

また輸入動物の神戸港到着が多かった頃、一頭でも多くの動物を観察しておきたい私は、その都度港まで出かけた。（現在は動物検疫の関係から名古屋および横浜到着が多い）。

と、ある日、クレーンのワイヤーロープがゾウの輸送檻を吊りあげ、陸送トラックに降した際、そのロープがゾウの片足にからみついてしまった。馴れない港の作業員ではどうにもゾウに近づけない。つい気軽に手伝ってしまった私は、思いもかけずそのゾウの攻撃をうけたのである。

まだ六〜七才。体重も二・五トンそこそこ、メスである程度は調教され〝足をあげろ〟〝座れ〟ぐらいはできる、そのゾウでも、からみついたワイヤーが皮ふにくいこみ痛いものだから、ゆるめようとする作業員に逃げ回るばかり。エイー、めんどうだ。そのオリの中に入りこんで痛がるロープをはずしてやったときであった。鼻づらの攻撃を制した私に、こんどはぐっと横腹を押しつけ、オリと腹で〝ペッチャンコ攻撃〟をかけてきたのである。

〈王子動物園学芸員／写真も〉

SALON KOBE JIDAI

ファッション時代のミニ・サロン

月刊神戸っ子では、この度、サロンを開設することになりました。北野町、山本通界隈のファッショナブルな通りに面したコンパクトなたまり場です。

スナック・スタンド風のサロンということになります。

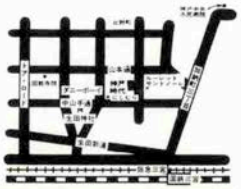
名前は新しい神戸時代を目指して〝神戸時代〟という風変りな名前をつけました。

神戸っ子の憩いの広場であったり、談論風発のサロンにもなり、ミニパーティがひらかれたり、ミニ発表会が行われたりで素晴らしい情報交換の場になります。
何卒お誘い合せお越しください。

毎夕5時半開店（日曜は休み）

SALON 神戸時代

神戸市生田区中山手通1丁目28
シャトーコトブキビル　1F
TEL　242－3567

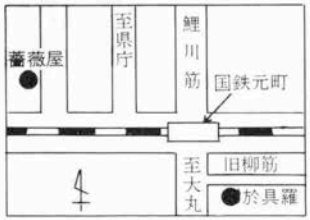


〈薔薇屋〉 も皆様に
なじまれてからもう5年を過しました。
秋10月から南店として
小さな酒肆 **〈於具羅〉**
を開店。新しい雰囲気のお店です

スナック & ドリンク

薔薇屋

神戸市生田区北長狭通5丁目19ノ4
兵庫県警本部西下る　tel(351)−4311
P.M. 5：00〜A.M. 1：00迄

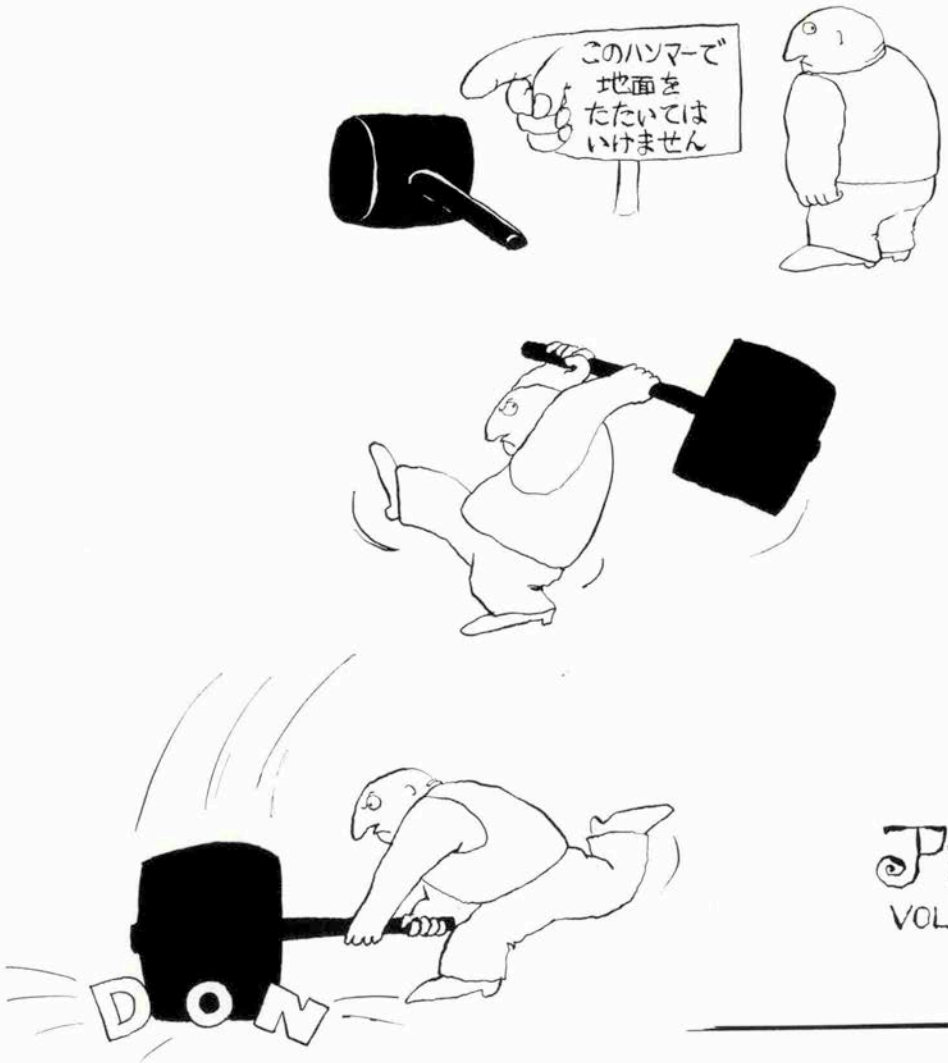


酒肆〈薔薇屋南店〉

於具羅

㊟ 吉田量子

神戸市生田区三宮町312
センター街(旧柳筋) tel(331)-3885
P.M. 5：00〜P.M. 12：00(日曜休)



アンデル線

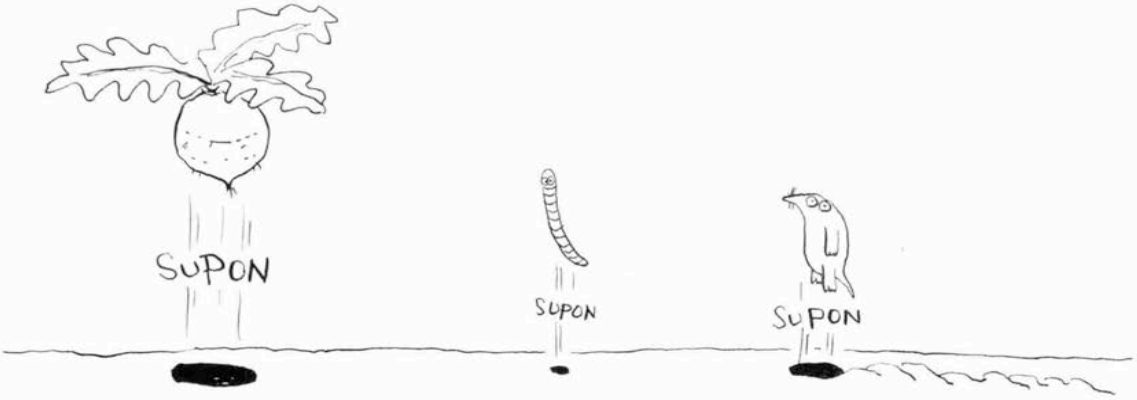
VOL.11 SUPON

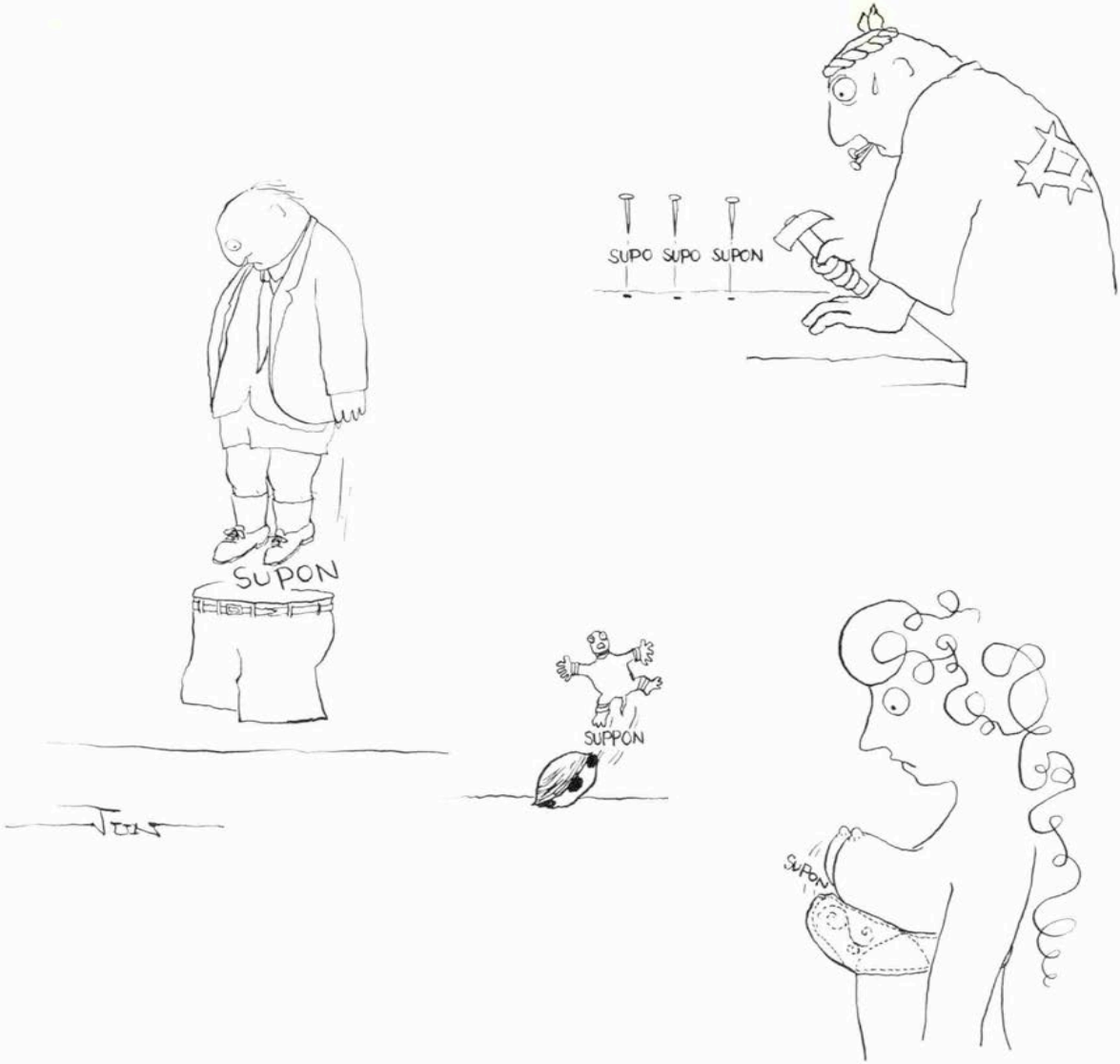
岡田淳

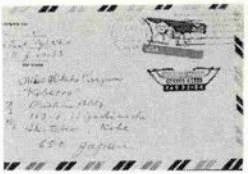
SUPO SUPON

SUPON
SUPON

SUPON


SUPON
SUPON
SUPON


SUPO SUPO SUPON
SUPON
SUPPON
SUPON



Air Mail from New York〈15〉

昼食になにを食う？

竹田　洋太郎〈在ニューヨーク〉
え・たかはし　もう

筆者

サラリーマンにとって、毎日考えなければならない大問題は「昼食になにを食うか」ということ。これは神戸のサラリーマンも、ニューヨークのサラリーマンも同じことです。ランチタイムになると、オフィス街のサラリーマン、サラリーウーマン（こんな言葉はなかった。日本ではOLというのでしたか）がどっと道路に繰り出します。そして、くいしん坊の神戸っ子と同じように、今日はなににしようか、あそこは値がまた上がった、などとしゃべりながら、その時間を楽しむわけです。

その中で、日本も米国も「お弁当組」があります。日本人なら、弁当箱という便利なものがあり、近ごろはシール容器を使って、それをいかにも大切そうにブリーフケースに入れたりするのですが、こちらで、弁当ケースとして売られている金属製の手提げカバンみたいなのは、ブルーカラーと小学生に限られていて、しかもだんだん廃れ気味です。

その代りに、クラフト紙のランチバッグ、つまりスーパーで買い物を入れる袋のごく小型のものがスーパーで売られていて、それにサランラップかなんかで包んだサンドイッチ、果物一個、カン入りジュースかコーラを入れ、そのままワシづかみにして持っていく人が多いようです。結構いい背広を着た中年紳士もです。

次に、いかにもアメリカらしい食い物屋としては、カフェテリア形式のもの。自分でお盆を持って列をつくり、好みの料理を入れてもらい、カウンターで金を払い、適当な場所をみつけて食べるところ。ミートローフや魚のフライ、野菜、パン、コーヒーで二ドル前後出せば満腹します。チップがいらないし、気兼ねがないので、私は愛用していますが、これは近ごろやや落ち目になって来ました。

その原因は、ファースト・フードの都心進出です。ニューヨークでシニセのカフェテリア、ホーン・ハーダートの一店がついに最近バーガー・キングに衣替えしました。大体ファースト・フードのマクドナルドや、このバーガーキングは、駐車場を広くとれる郊外やハイウェー沿いに発達したものですが、いまや都心のランチ族にねらいを定め、大量生産、小数メニューでどんどんふえてきました。

こうなると値段の点では、カフェテリアのような多数メニューをそろえる店よりも安いというので、開店と同時にサラリーマンがどっと押しかけ、開店記念にくれる紙の王冠やバッジなどを子供のみやげにもらって帰るパパが列をつくる始末。

すると個人経営のハンバーグ屋が、対抗上大きな看板を立ててサービスの良さを誇るのですが、チップの国アメリカでも、チップのいらないファースト・フードに押され気味です。

朝食を家を出てからとる人も多いのですが、朝食、昼食専門店として大チェーンになったのが「チャック・フル・オ・ナッツ」という店で、ニューヨーク市内の主な

通りの角に必ずあるといっていいくらい。全部カウンター形式で、一般の店とちがって、注文すれば比較的早く飲物や料理が出てくるのが特徴。これは大企業になり、自社ブランドのコーヒーを売り出すやら、ラインゴールドという倒産しかかったビール会社をそっくり買い取るなど話題をまいています。

テーブルにちゃんとすわって、となれば、あちこちのホテルのコーヒーショップも手軽ですし、全米にチェーンを持つ「ハワード・ジョンソン」がNYタイムズのある記事によれば「アメリカを代表する味」ということになります。もちろんこれは皮肉なので、統一メニューで材料のほとんどは冷凍食品を使い、どこでたべても同じ味だからです。ただ私の会社の近くのH・Jは黒人のウェートレスがキビキビしていて、感じは悪くありません。顔見知りの彼女がつい「マルティーニなどいかが？」というので注文したら、ジャンボ・マルティーニを「本日特別サービス」といって持ってきました。これを飲んだ日の午後はまったく仕事にならないほどゴキゲンになったくらいですから、調子にのってはいけません。

ちゃんとしたレストランやホテルの食堂でお客を接待したりされたりすると必ずイッパイ飲むし、その後は仕事にならない、というのがビジネスマンのなげきであり楽しみであるようです。

さて、私の会社の人たち、なにを食うかと思案に詰まると、きまっていくのが近くの「秀」という日本料理店。日本人、アメリカ人にかかわらず、ですが。ここで天丼や他人丼が一ドル50。天ぷら定食で三ドル50プラスチップとなりますが、困ることはいつも満員。わりと若いアメリカ人が、列をつくって席のあくのを待っています。それでもいったんすわった人は、ノンビリ食事を楽しんでいますから、セッカチの日本人はかえって少ないくらい。他の日本料理店はやや値が張って、ビジネスランチ、つまり接待用となるようですが、仕事でこちらに一カ月滞在中、昼食は全部日本食で済ましたという人もいて、日本にいるよりかえって日本食のランチの回数が多いと、あとで笑っていました。こちらには出前もあります。近くのレストランへ電話をかければ、アルミフォイルの弁当箱に、サラダでも、ハンバーガーでも配達してくれ、出前のおじさんにチップ25％。日本食弁当も月極めで予約しておけば毎日配達してくれる店もあります。だが、やはり、どこかのテーブルにすわって、東京のどこのソバがうまかったとか、日本式ライスカレーが食べたいとかいいながら食事するのが、楽しみであることは間違いありません。ついでながら、日本式カレーは調理場に強いニオイがしみつくので、カレーをいつも出す日本レストランがないのが残念。この話を聞いた大商社の人が「それなら全米にカレーの店のチェーンをつくりましょうか」―日本人はすぐこれだから、いやになります。

『ヘーイ！　天ドン、イッチョー』

ファッションとCINEMA

淀川長治〈映画評論家〉

衣服はアダムとイヴのいちじくの葉から生れた。イヴが禁断の実を噛ったばっかりに、イヴはアダムのあれを見るのを恥じアダムもイヴのあれを見るのを恥じ出して互いにいちじくの葉で前をかくした。

そのいちじくの葉はやがてパリにニューヨークに、ショオ・デザインをもって御婦人がたのあこがれとなった。

ところがパリ・ニューヨークのそれを、もっと手っとりばやくお見せするのが「映画」。

タテにヨコに前にうしろに「映画」はその流行衣服のありとあらゆる細部を見せて「華麗なるギャツビー」は一九三〇年型の流行を生み「スティング」はその男性専科というお役目を持った。

しかし映画はさらにそのヘア・スタイルにまで及び、オードリー・ヘア・スタイルやセシール・カットを生むそのはるか以前のサイレント時代の末期早くも、コーリン・ムーアのおカッパ・ヘアにトーキーに移ってからのルイズ・ブルックスのヘア・カット、あるいはケイ・フランシスのオール・バック型またはクララ・バウのキャベツ型。

これが男性となるやヴァレンティノのもみあげ。ヴァレンティノの二つのまゆげを一つに結んだ一本線まゆげディートリッヒのハリガネまゆげ……かくのごとく映画はそのスタアによって、流行はみるみる男女間にしみこんでゆく。

「モダン・ミリー」から始まった一九三〇年型へのカム・バックは「ペーパー・ムーン」「メイム」から、さてはギャング映画の「デリンジャー」にまでその流行は画面内に仕組まれて、この一九三〇年代カム・バックはついにカルロ・ポンテ製作ソフィア・ローレン、リチャード・バートン主演「旅路」にいたり、一九〇四年のはるかなるクラシックにまでその流行の食指を伸ばす。

ようするにミニは去ったのだ。日本婦人にとってあのミニほど残酷なるものがいったい他にあったであろうか。おみあしがかくも太いということをお示しになるためのあのミニを何ゆえに日本の御婦人がたは先きを争って用いられたのか。流行こそは勇敢の二字につきる。

ヴァレンティノこそが似合ったラテン型のもみあげを映画は残酷にも日本のお兄さんに強いて、ジャガイモが耳の両わきに毛虫をつけたごとく、ディートリッヒのハリガネまゆげを日本のお姉さんに強いたがためにタコがヒステリィをおこしたごとき顔になったとしても、それは「映画」の罪とは申せまい。

アラン・ドロンが革ジャンパーのジッパーを女の唇でひき開かせたのを眺め、そのとおり、日本のお兄さんが

ジャンパーのジッパーを彼女の顔に近づけ「あんた、くさいわネ！」と彼女にとび離れられたとしても、それは「映画」の罪とは申せない。

しかし映画とはそれほど世の善男善女に、ありとあらゆる「スタイル」をもしみこませ、女に一本のシガレットを求められ、男は二本をくわえその二本に火をつけてすーッと吸いこんで、さてその一本を彼女にあたえたそのシーンから、この二本が流行して「あんた、不潔だわ」と相手の女性からどなられたとしても、それは「映画」の罪とは申せまい。

イタリアのフェリーニは「アマルコンド」で、これも一九三〇年代のフェリーニの少年時代その春夏秋冬の一年の詩を描く。かくてここにも一九三〇年その懐しき良き時代が今によみがえり、そこに登場の女性のかんばせ、その衣服、それらが懐しの一語で観客の心をつかむ。

もはやミニは去った。エディット・ピアフ若き日のそのパリ下町の彼女のあえぎ苦しんだ泥だらけの青春を描く「愛の讃歌」これもまた一九三〇年代だった。

シャンソンがジャズがタンゴが再び今日現代のスクリーンによみがえるとき、その衣服もまたエレガントへとカム・バックする。

ピランデルロの原作の映画化「旅路」にいたってはそのバートンの衣服のクラシック。ソフィア・ローレン扮する悲恋の女アドリアーナ・デ・マウロのそのボンネットそのアイボリィ・イエローのレースのロング・スカート。これらがクラシックゆえに今日のニュウ・モードへのあこがれとも見えるその流行そのファッションその感覚。

やがて男は再び懐しのストロォ・ハットにハンチングにサスペンダーに身をやつすであろう。「スティング」のヒットはそこにもまたヒットの鍵をかくし、「華麗なるギャツビー」のロング・スカートにハイ・ヒールのそのエレガントがまたこの作品のヒットの鍵でもあることを考えると、映画と流行これこそは、華麗なる宿命か。

フェリーニ!!の少年時代を描いて一九三〇年代の懐しき「アマルコルド」（上）。はるかなるクラシック「旅路」（中）。「デリンジャー」（下）のギャングも三〇年調ファッション。

女体百景

《28》

H・ジュニア

え・浅野俊一

ダム広場の女

さてさて、ここはアムスのダム広場。夏は世界のヒッピーのメッカだ。そもそもオランダは、政府自ら、ヒッピーの保護政策をとっている。たとえば、ビール工場の古倉庫を改良して、安く一夜の宿を提供するほどの親心！　これが自由の国オランダの伝統か？　地動説に賛成したデカルトはフランスからオランダ宮廷へ遁れ、十八歳の妻と離婚して英国を追われた天才詩人シェリーもオランダに逃げた。こんな例はいくらもある。

わがH・ジュニア氏も、チャメ気を出して、自分を現代の自由思想家になぞらえ、今日は一日、試みに、ダム広場のヒッピーの群れに自らを投じてみたのである。緑のランニングシャツにチョンギリジーンズは、今日のために わざわざ神戸の外人学校のバザーで買い求め、はるばる日本より持参のしろもの。こんな軽装で朝からダム広場の敷石に、黙々と腰を下ろしたままだ。

ここはヨーロッパ。皆他人のことに無関心とはいえ、人はどう思うだろうかと想像するとおかしくなる。夏の日差しはきついが、時に吹くそよ風は冷気をさえはらんで心地よい。なんともいえぬいい気持だ。周囲には、アメリカ女もいる。イタリア女もいる。スペイン女も、パリジャンヌも……。皆鼻が高い。いい体をしている。食欲をそそる女ばかりだ。実にいい眺めである。

午後になり睡魔が時に襲ってくる。夢かうつつか、うつつか夢か？　ついうとっとした瞬間！

「ジャパニーズ？」

と、色っぽい若い女の声！

ハッと声の方を見ると、いつの間にそばに来たのか、スラリスンナリ、飛びつきたくなるような柳腰のオランダの美女が、これまたジーンズショーツにロングブーツ肩丸出しのシャーリングブラウスといういで立ちである。ウェーブの美しいロングヘヤーは、もちろんしなやかな金髪だ。

「オー　イエース！」

眠気は一辺に吹っ飛んだ。

「ユー　ジスナイト　アルバイト　オーケー？」

相手にとって不足はない。昨夜の飾り窓の白豚女とは似ても似つかぬいかし方だ。後はどうなと、キャーなろたい！

「オー　イエース　オーケー」

「オーケー？　オー　ベリーナイス　ダンキュー」

「オー　ダンキュー」

オランダ語で有難うのことをダンキューというのだ。

その夜、十一時、約束のディスコティック、キングスクラブは、ディスクジョッカーの突飛な洪笑と踊り狂う人々の興奮のるつぼだった。彼女はBMW・2002tiiでH・ジュニア氏をかっさらい、運河沿いのポルノ地帯へとフルスピードで疾走した。ついたところはポルノショーの楽屋であった。すでに五組ほどの男女が裸で出番を待っていた。彼女は早速、二人の女をH・ジュニア氏に紹介した。一人は東洋人らしいアラブ系の髪の黒い小柄でやせた女。もう一人は年増の小ぶとりの小麦色の肌をした金髪で、オランダ人とドイツ人のハーフらしい。この二人の女こそ、H・ジュニア氏の今夜の実演の相手なのであった。これが彼女のいった「アルバイト」

だったのだ。

えい！　ままよ！　お金をもらってやらせてもらうからには文句はいってはおれぬ。ここまで来たからには後には引けぬ。この日のためにこそ、日頃、錬えに錬えた自慢のシンボルではなかったか。

H・ジュニア氏の出番は一番最後であった。ソウルミュージックに合わせて、二人の女の手をひいて舞台へ出た。前の組の見様見真似である。何しろ生まれて初めての経験なのだ。薬は飲まされているものの、シンボルが果たして立つかと心配したが、いざ舞台に出ると何のことはない。まず、東洋人風の女の上体をせめている間、H・ジュニア氏の下半身は、上向きに寝た年増に尺八されているのだ。そして完全にボッ起したところで、小柄な方に挿入し、お尻を客席に向け、玉を客席から見えやすい位置にして、ミュージックのテンポに合わせて、腰を前後にふるのである。この間、年増は一人でもだえるのだ。やせて小柄な女がよすぎるので、H・ジュニア氏は、途中でもらしそうになった。射精はタブーだ。彼は一、二滴は仕方なくもらしたが、あわてて抜いて、さっと年増の上半身へ飛び移った。今度は、小柄が、H・ジュニア氏の下半身を尺八するところから始まるのだ…。

アルバイトは無事終わったが、おさまらないのはH・ジュニア氏のジュニアである。このアルバイトの報酬はいかが相成るかと、心待ちに楽屋で待つ中に、憧れのブロンドの雇い主が現われた。時計はもう午前二時である。

彼女は、再び彼をBMWの助手席に乗せ、うむもいわせず彼女のアパートへ連れて行った。

〈私、これから今夜のセックスアルバイトのお礼をしたい……〉という意味のことを彼女がいうや否や、彼女はさっと全裸になり、彼に革のむちを手渡した。そして自分は黒々と鎖のついた幅広の鉄輪を、開いた両脚にはめ四つんばいになって、両手にも鉄輪をはめてくれとH・ジュニア氏をうながした。

〈さあ！　心ゆくまで、私の背中をぶちなさい！〉

H・ジュニア氏はいわれるままにむちをふり下した。その度に彼女は「ウオー」と身をそらせ、くねらせ、お尻を突出した。彼女の肛門が彼の目前に迫ってくる。

「アーヌス！　アーヌス！」

彼女は、堪えかねたように叫んだ。

H・ジュニア氏はそれが肛門への挿入をうながす言葉であることを直感した。彼は意を決した。たけり狂う、真赤に充血したジュニアは突進した。

「ギャオー！」彼女は、恐怖と歓喜の入りまじった叫びの中に果てた。彼も後に続いた。

H・ジュニア氏は、早速ビデにまたがり、大切なシンボルを石けんで洗いながら、ダム広場の女が柳腰であったこと、柳腰の女が一般に、レズ、マゾ、アナルセックスに走りやすいという説について、成程、と思った。

そして、アムスとアヌスと何か関係があるように思えてならなかった。

ぴっと・いん

★〝セントジョージ〟がタキシードパーティーを開催

十月十日、北野町のセントジョージで第一回タキシードパーティーが開かれた。

これは、ゆとりあるクラブライフを目指すセントジョージが、会員に、優雅なひとときを満喫して貰おうと企画したもので、神戸では初めての試み。

当夜はタキシードの紳士とドレスの淑女が、古谷充とザ・フレッシュメン、ゲストの沢たまきの歌と演奏で、ダンスや語らいを楽しみ、二階では、ゲームに興じたり、セントジョージの素晴しいパーティーを存分に楽しんでいた。

優雅なセントジョージの夜

セントジョージジャパン　神戸市生田区北野町一丁目一三〇　☎二四二—一二三四代表

★英国風サルーン〝ジーナ〟へどうぞ

生田区中山手通一丁目、お多福湯の南、ホワイトキャッスルビルの三階に「ジーナ」というかわいい名前の英国風サルーンがこの秋オープン。この夏までOL生活をしていたというチャーミングな秋田多恵子さんが人との話合いを求めて開いたというだけあって、その素人っぽさが魅力。店内は大変明かるく清潔で、秋田さんが岡山出身なので飾り棚に備前焼その他の置物がたくさん並べられており、落着いたサロン風の雰囲気につつまれている。自慢できるのは「トイレ」が広いこと。一度ぜひどうぞ。

〝よろしくお願いします〟

神戸市生田区中山手通一丁目一〇五の二　ホワイトキャッスルビル3F　☎三二一—五五七七PM5・30〜AM12・30年中無休。鉄板焼ステーキ二五〇〇円　チキンバスケット六〇〇円、鍋やきうどん六〇〇円、湯豆腐六〇〇円、水割五〇〇円、ビール三五〇円。

★「佐々やんの店」オープン！

「佐々やん」でお染じみの佐々十郎さんが、ロイヤルスナック〝佐々〟をオープンした。「僕たち、芸能人仲間でも、いろいろお商売をしている人もいますが、神戸でやるのは、僕が初めてなんです。今後、テレビの仕事を重点的にやっていきたいと思っているんですが、今まで、イキヌキの場として接してきた、大好きな神戸で、この場所を基点にしていろんな人とのふれ合いを持ちながら、俳優としての自分のものをつかんでいきたいですね」。

ゴージャスな雰囲気の店内で、自ら、飲物をつくってお客にサービスをしながら、「長い目でみた、神戸でのロマンを育てたい」と熱っぽく語る「佐々やん」、舞台で大いに我々を楽しませてくれた佐々やんのこと、楽しいお店づくりはお手のもの？

ロイヤルスナック「佐々」　生田区加納町四丁目一一七〇　神三ビル二階　☎三二一—三七三三

●神戸うまいもんとドリンキング

酒肆　於具羅〈おぐら〉

センター街〈旧柳筋〉　☎331—3885

花隈でスナック&ドリンクの〝薔薇屋〟を開いている吉田量子さんが、10月1日センター街（旧柳筋）に姉妹店の小さな酒肆「於具羅」（おぐら）を開店した。

アイボリーの色調がやわらかい店内は、小じんまりとモダンにまとまっていて気軽に洋酒を楽しめそう。

ママのカコちゃんのほかに女の子が二人。つき出しに家庭料理を出してくれるのがよく、広い薔薇屋にはない新しい雰囲気がある。

ビール400円、ニッカ500円、つき出し300〜500円　日曜休　午後5時〜12時

ママの吉田さんを囲んで

[redacted]

—華麗なるフラメンコの宵—

11月16日(土)

●8:00p.m. ●9:30p.m.

長らくスペインで活躍をしていた東仲一矩の
素晴しいショーをエル・ヴィノでご満喫下さい。

勝手ながら、お召しあがりもののオーダーは、
ショータイムの30分前までにお願いいたします。

フラメンコの店

エル・ヴィノ

5:00PM～2:00AM(日曜祭日12:00AM) 水曜日定休
第1・3土曜日はフラメンコ舞踊のショータイム
神戸市生田区北野町3丁目48 アニルドマンション1階
☎ 241—1344

世界最高の品質を
誇るアラガワの支店

仔牛のカツ	1,000円
タコサラダ	400円
ハンバーガー	400円
コーヒー、ティー	200円

砂時計

正午～9時 月曜定休

生田区山本通り1丁目35
東洋ハイツ1階
TEL 078—241—1857

元祖 焼たこ

おいしさが
口いっぱいに
ひろがる……
本場の味

ばたなち

■三宮センター街柳筋店
TEL 321—3446・331—0572
■新開地店
TEL 576—1191
■平野店（平野市場内）
TEL 361—0821
■三宮センター街サンプラザビルB_1
TEL 391—3793

[redacted]

●こん立て●
たがのり弁当
やよいの里
花そうめん
みむろそうめん
天ぷら
おつくり
どびんむし

和風季節料理 花

11：30A.M.～8：00P.M. 月曜日定休
さんプラザ地階 ☎ 331—0087